連載している大阪工業大学の綾教授のコラムは残念ながら休講です。
その代わり池田先生にご登場いただきました!

水辺の生物多様性



人を自然に近づける川いい会
参謀総長　池田　哲哉

水に関わる環境を考えた場合、例えば川は、山奥から湧き出した一滴の滴から始まり、最初は細々としたか弱い流れですが、周辺の沢水と合わさりながら徐々に太く力強い流れとなり、急勾配の山肌を削りながら、深い山間の谷から平野部に流れ出します。その後、徐々に川幅も広がり、瀬・淵・瀞が連続し、河畔林や礫・砂河原、ワンド・池などが存在する、河川の中で最も多様な環境を有する中流域となります。そして川はさらに幅を広げ、流れも緩やかになり、ヨシ原、中州、干潟といった下流環境を経て海へと繋がるのです。全ての生物にとってかけがえのない“命の源”ともいえる“水”のあるところ、すなわち『水辺』は、様々な生き物が集まり、生息・生育の場とし、移動・休息などにも利用する、つまり、生きるために無くてはならない場所なのです。
水辺の様子を思い描くと、水際には岩や礫、砂、泥などそれぞれの物理環境に応じた水を好む植物が生えています。この植物帯は、陸上昆虫の棲み家となり、これを餌とする両生類・爬虫類が集まってきます。さらに、この小動物たちを餌とする哺乳類や鳥類も集まってきます。一方水中では、水を必要とする水生植物が繁茂し、水生昆虫や底生動物が生息し、それらを餌とする魚介類が生活しています。さらに水鳥は、水草や魚を餌とするため、水中をも利用しているのです。また『水辺』の生物同士の関わり合いは、「食う・食われる」の食物連鎖の関係に加え、共生・寄生・競合といった関係を通じて複雑な生態網を形成し、自然の恵みの上に成立しています。
『水辺』は、多様な自然環境に応じて多様な生物が“生きる場所”として多面的な機能を発揮し、さらに視野を拡げると、水辺から河川敷・水辺林～後背地～田畑～里山等々その連続する生物回廊は、多くの生物を育む場を提供しているのです。

来た・見た・聞いた　淀川雑記帳

近年、集中豪雨による内水被害が頻発している。今年も各地で大規模な被害がもたされた。これまでに河川レンジャーは地域住民への土嚢づくり体験などに取り組んできたが、さらに活性化させるため、11月中に全3回の「防災・減災に向けた研修」を開催。
淀川河川事務所は、河川整備計画で目標とする洪水に対して安全に流下させる治水対策を実施しているが、今後は河川整備と併行して、住民自身が取り組む減災活動や避難体制の確立が重要となる。我々レンジャーは、これまでにも地域ニーズに合わせた様々な活動を展開しているが、地域の防災に焦点を当てた取り組みがますます増加するであろう。いい川づくりの実験として、ある川のメンテナンスを行っているが、去年も今年も大雨に泣かされた。自然災害への備え。どこまで頭を突っ込めるかわからないが、できる限りやってみようと思う。
（編集長・石山郁慧）

河川と環境の法律相談所
legal advice

野良猫への餌やり

人を自然に近づける川いい会　弁護士　藤原 武士

公園に野良猫のために餌が置かれていることがあります。野良猫の餌やりを直接禁止する法律はありませんが、東京都荒川区のように、野良猫に対する餌やりを規制する条例を制定している自治体もあります。
大阪市でも、野良猫への餌やりを禁止する条例を制定する議論もあったようですが、制定にいたっていません。条例がないので、誰でも、自由に餌をやってよいのかといえば違います。公園には管理権者がいますので、管理権者が餌やりを禁止する以上、公園で野良猫の餌やりは禁止されています。野良猫の餌やりが原因でトラブルになっている例は多いのではないでしょうか。 動物愛護の視点、地域猫制度など、野良猫の問題はこれからも議論をしていかないといけない問題です。

川と人　人と人を結ぶ
淀川管内 河川レンジャー
VER RANGER

デザイン監修：NPO法人nature works　泉野幸彦・ありさだあきよ
イラスト監修：NPO法人nature works　小村一也
取 材 協 力 ：人を自然に近づける川いい会
発 行 支 援 ：国土交通省 淀川河川事務所

バックナンバーは、http://npo-natureworks.net/　の「無料の資料」からダウンロードできます。

淀川自然画報
2014年11月号
No.10
淀川水系の生物多様性を
見る・知る・楽しむ
生きものシグナル
YODOGAWA SHIZEN GAHO

水辺の博物誌



愛嬌ある里山の隣人
ホンドタヌキ *Nyctereutes procyonoides viverrinus*

淀川の支流、河原や人里で夜間に活発に活動するタヌキ。体型はキツネとは異なって、ずんぐりしています。これは原始的なイヌ科の特徴を残しているからだそうです。木の実や小動物などなんでも食べる雑食性で、生活圏が人と近いため、夏の子育ての時期には餌を求めて人家に近づくこともあります。地域によってはアナグマと同一視され「ムジナ」と称され、馴染み深い動物ですが、近年は人里で観られる機会が減少しています。（画/小村一也）

発行責任者　淀川管内河川レンジャー・石山郁慧

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史

淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

カネヒラ

Acheilognathus rhombeus



カネヒラはコイ目コイ科のタナゴの一種で、日本に分布するタナゴのなかで最も大型になる淡水魚です。濃尾平野より西の本州、九州と朝鮮半島に分布していましたが、国内では、本来の生息地以外にも分布を拡大しています。全長は最大で15cmに達し、体の肩部に青緑色の斑紋があり、口に1対の短いひげがあるのが特徴です。繁殖期になると、オスの体側は淡い青緑色に、背鰭、尻鰭がピンク色の鮮やかな婚姻色と口元には白色の追星がみられます。また、メスには短い産卵管が現れます。食性は植物食に偏った雑食性で、河川や湖沼の水草が繁茂する流れの緩やかな場所に生息しています。繁殖期は秋の9～11月で、淡水産の二枚貝のイシガイやカタハガイ、タテボシガイ等に卵を産みつけます。産卵後、数日で孵化しますが、仔魚は二枚貝内で越冬し、翌年の春に貝から浮出し、急速に成長してその年の秋には成熟します。食用として利用することはほとんどありませんが、繁殖期のオスには美しい婚姻色がみられ、また国内産のタナゴのなかではもっとも大型になることから、観賞用として飼育されます。特にオスの大型個体は、通常のオス個体より、背鰭、尻鰭がより伸長するため、特に人気が高く、一見の価値があります。



繁殖期になるとオスは虹色に光り輝く黒バックで撮影するとその美しさがよくわかる

under the water

the waterside

水辺の虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

環境省　環境カウンセラー　川島 大助

回遊性のモクズガニ

淀川の淡水域には、モクズガニとサワガニの2種のカニが生息しています。サワガニは生涯を淡水で過ごしますが、今回ご紹介するモクズガニは海と川を行き来する回遊性のカニです。淀川では河口～三川合流付近、なかには三川（宇治川、木津川、桂川）をさらに遡上するものもいます。宇治川では天ヶ瀬ダムの上流、さらには琵琶湖でも稀に確認されているようです。ダムの堤体は遡上阻害となりますが、水際の斜面や道路等からでも遡上します。このように水から出ることで鳥の餌食になったり、道路では車に踏み潰されてしまう危険もあります。

本種は秋から冬に成体が川から海に産卵のため降海します。海で生まれた幼生（ゾエア→メガロパ幼生へ変態）は海域～河口域で浮遊生活し、その後、秋あるいは春～初夏の2季に河川下流に着底して稚ガニ（甲幅2mm程度）に変態し、徐々に河川遡上していきます。3～5年（寿命）で甲幅は7～8cmに成長します。そのころにはハサミにはたくさんの毛





大きなものを蒸して食べると甘みがよくわかる

（藻くず）がつき、この様相が「藻屑蟹」の語源といわれています。食性は魚や貝類、水生昆虫等が主と考えられてきましたが、実際には川底の緑藻（糸状の藻類）やデトリタス（枯死植物由来の有機物砕片）が主な餌となっているようです。本種は食用で有名なシャンハイガニの仲間で、日本でも秋に川を下るモクズガニは漁獲対象となり水産資源になっています。海～川、川～海へと長い距離を回遊してきたモクズガニは、海産のカニにはない独特の甘み、そして濃厚なミソを味わうことができます！

the worst 100

花想鳥感

四季折々、水辺の生物多様性

芥川緑地資料館　主任学芸員
高田 みちよ

黄色に染まる秋の堤防

秋の淀川の堤防って、黄色一色ですよね。すっかり秋の風物詩になっていますが、ほんの50年前には秋の堤防は茶色だったはずです。何が堤防の色を変えたのか、みなさんならご存知でしょう。

秋に一面の花を咲かせるのは「セイタカアワダチソウ」です。北米原産のキク科の多年草で、「背が高く」「種子の綿毛が白く泡立っているように見える」ところから名づけられました。高さは3mにもなり、硬い茎は木のようにもみえます。黄色い花がよく目立つためか花粉症の原因植物と思われがちですが、昆虫に花粉を媒介してもらう「虫媒花」であるため、花粉はねばりがあり風で飛び散ることはほとんどありません。たくさんの花が集まった「集合花序」で、一つ一つの花は花弁があり、明るい黄色で美しいです。そもそもは観賞用として明治時代に導入されたものだそうです。種子はタンポポのように綿毛があり、風でふわふわと飛び散って河川敷などの空き地で生長します。第二次世界大戦後に急激に分布を広げ、今では秋の風景となってしまっています。春はセイヨウカラシナ、秋はセイタカアワダチソウ。今や川のイメージカラーは黄色です。

セイアカワダチソウは「要注意外来生物」に指定され、防除の実験も行われています。多年草なので、秋に地上部が枯れる





写真は芥川の堤防に咲いていたセイタカアワダチソウ

時、地下の根に栄養を移動させます。この前に刈り取ると、勢力が衰えます。堤防であれば、年1回の刈り取りで背丈低く押さえることができ、年3回以上の刈り取りでは数を減らすことが可能です。とはいえ、広大な面積に広がった植物を防除することは、なかなか難しいようです。

the sky & land

侵略的外来生物

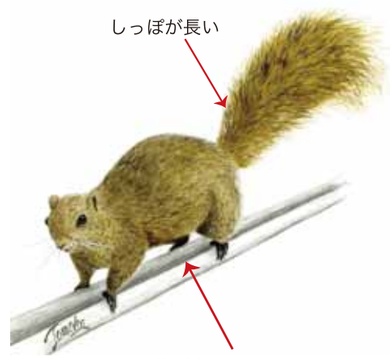
淀川ワースト100

リス科　タイワンリス

Callosciurus erythraeus thaiwanensis

淀川管内河川レンジャー　石山 郁慧





AN INVADER

正式名はクリハラリス。原産地は台湾。ニホンリスよりもひと回り大きく、尻尾が長いのが特徴。主に種子や果実を食べ、冬は樹皮を剥がして樹液をなめる。大阪では万博開催時に台湾との友好記念に、大阪城公園につがい3組を放したものが野生化して定着したと聞いている。

ヤマネ・ホンドリスなどの住処を奪うだけでなく、神奈川県では電線をかじられるなどの被害もあるとのこと。繁殖力が強く、妊娠期間は40日ほどで、1年で成体になる。1回にだいたい2匹を生み、年3回の出産も可能だという。各地の観光地で増え続けているが、国の指導は個体数の減少。鎌倉では年間500匹が駆除されているという。



写真（上）
写真提供 / 杉浦　豪
写真（下）
photo by pakutaso.com

